

忍頂寺務年譜データベース

福田 安典
尾崎 千佳
青田 寿美
共編

凡例

一 本年譜は、近世歌謡研究者・忍頂寺務（1886～1951）の生涯にわたる業績を可能な限り網羅し、その交友関係や知的交流の有様を発掘していくことによつて、近世風俗文化学研究に一石を投ずることを目的とする。

一 採録する内容は、以下の7項目からなる。

西暦……月日が不明の場合に限り、その部分に00を入れた。並び替えるためのフィールド。（本報告書附録のCD-ROM参照）

日付……月日が不明の場合に限り、その部分に半角xを入れた。

事項

居所

典籍の出入……書物や資料の購入・譲渡について記した。購入元や譲渡先等に当たる書店や機関・個人に関する情報は（ ）内に簡潔に示し、矢印で以て典籍の移動を略示した。

（例）『武家義理物語輪講』（務 神戸市立図書館）……務が寄贈

『吉原大黒舞』（務 鹿田書店）……務が購入

書籍の貸借に関しては、「事項」フィールドに記すこととし、これと分けた。

典拠等……情報の出典やニュースソースを示した。（本報告書附録のCD-ROM参照）

備考

一 本稿では、煩瑣になることを避けるため、上掲の7項目中、丸数字の5項目のみを掲出した。「西暦」と「典拠等」および「備考」の一部についても割愛したが、別途、本報告書の附録として付したCD-ROMに、全情報を収めた「忍頂寺務年譜データベース」を収録した。

一 上掲項目「典籍の出入」のうち、神戸市立図書館および成田山仏教図書館への寄贈詳細は、本報告書の「神戸市立図書館蔵忍頂寺務旧蔵本について」、「成田山仏教図書館蔵忍頂寺務旧蔵本について」を、書籍の貸借に関しては、同じく「小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録・解題」を、併せてご参照いただきたい。

- 一 務の著述に関しては、他の年譜事項との関連で必要と判断されたものに限り採録した。その一覧は、本報告書の「増補改訂忍頂寺務著述目録」を参照されたい。
- 一 鳶魚日記からの記事には、書簡の応答に際してタイムラグのあるものを含むが、原則そのままとした。
- 一 論文は「」、典籍・単行本・紙誌名は『』で括った。ただし、細見・瓦版の類は、一般名詞として扱うこととし括弧で括らずに掲げた。
- 一 旧字は、原則として新字に改めた。
- 一 本データベースの根幹は、
 - 1．三田村鳶魚「日記」(『三田村鳶魚全集』26～27巻、中央公論社)
 - 2．仙台忍頂寺家所蔵資料
 - 3．大阪大学附属図書館所蔵・小野文庫
 に拠つてなる。1は福田安典、2は尾崎千佳、3は青田寿美がそれぞれデータ採取にあたり、全体の取り纏めを青田がおこなった。プロジェクトメンバー(飯倉洋一・内田宗一・浜田泰彦・正木ゆみ・鷲原知良の各氏)からの情報提供に対し、記して御礼申し上げる。

「付記」本報告書掲載の諸論考中、年譜事項として本稿に摘記すべき情報も少なからず存するが、入稿期限の関係上それらを全て採録することが叶わなかった。ただし、附録のCD-ROMには、可能な範囲でデータの反映をおこなっている。(青田寿美)

日付	事項	居所	典籍の出入	備考
明治19／12／08	淡路志筑に生まれる。	志筑町一五六 九番地		
明治32／04／XX	兵庫県立洲本中学校入学。			
明治34／02／XX	洲本中学二年生の終わり頃、田中晩水・高田蝶衣等とともに俳句同人「白雪会」結成。毎週土曜に会員宅持ち回りで句会を開き、洲本住の梅処という旧派俳人に添削を依頼する一方、『中学時代』『ホト、ギス』等を購読。			
明治34／03／XX	大谷正信(号、繞石)洲本中学に英語教師として着任。以後、白雪会同人、繞石に運座の方式を教わり、添削批評を受ける。			
明治35／11／XX	永田秀次郎(号、青嵐)、洲本中学の第三代校長に就任。学業の妨げになるとして生徒の句作を禁じる。			
明治35／11／XX	大谷正信(号、繞石)、洲本中学を辞して真宗大学に転任。後任の英語教師として若月保治(号、紫蘭)着任。			
明治35／12／19	白雪会同人による俳句雑誌『落ち栗』創刊。高田蝶衣序、大谷繞石題字。			
明治36／03／05	白雪会同人俳句雑誌『落ち栗』第2号発行。大谷繞石送別記念号となり、事実上の終刊号となる。			
明治36／07／15	『ホト、ギス』第6巻第11号「地方俳句界」欄に、「白雪会」の俳句六句中、務(号、木筆)の「雨乞の人騒がしや千光寺」句も載る。同欄「テフィアン小集」欄にも、木筆「山吹や子持たぬ人のうらやまし」句掲載。			
明治36／09／25	『ホト、ギス』第6巻第13号「地方俳句界」欄に「洲本町汐見町高田蝶衣報」として「テフィ庵会」の句三句掲載。務(号、木筆)の「真中に橋ある池や蓮の花」句も載る。			
明治36／11／20	『ホト、ギス』第7巻第2号「地方俳句界」欄に、「白雪会」の報として、唯一、務(号、木筆)の「仁王尊の足もと暗し虫の声」句が載る。			
明治37／03／20	兵庫県立洲本中学校卒業。その頃の句に、木筆号で「もずさしは松下の宿に入りにけり」「仏跡のある棧道の落葉かな」。			
明治37／04／10	『ホト、ギス』第7巻第7号「地方俳句界」欄に、「テフィ庵会」の句二句掲載。			

務(号、木筆)の「羊飼ふ牧場に多し露の臺」と蝶衣句。

明治41/04/01 神戸高等商業学校卒業。その頃の句に、「暁やかまどの中に蚊のねむる」。

大正01/xx/xx 神戸に居住。(大正初年)09、10年頃)

神戸市眞合区
熊内

大正06/06/xx 珍書保存会成る。後に務も会員に。

大正08/01/11 森西ウイリアムス合資会社出資金八万円。無限責任社員となる。

大正11/xx/xx 大阪に居住。(1年間)

大阪市南区勝
山通二丁目

この頃、九州の某書生に、「諸行無常朝顔もあり夕顔も」「麦の穂に出たる話や城の跡 砂山城跡にて」の二句を贈る。

大正11/03/10

『一目千本/花すまひ』(務
吉田書店)

「吉田書店にて、「一目千本/花すまひ」下巻一冊を金一円五十銭にて購入す、落丁あり惜しきものなり、」

大正11/04/17

吉原細見廓の賑ひ「明治十年五月福田栄蔵編」(務
鹿田書店)

名物細見「明治元年冬刊」
(務 鹿田書店)

『吉原源氏六十帖評判』
上巻(務 細川書店)

「京都細川書店より、「吉原源氏六十帖評判上巻一冊だけ購入す、此書に付ては、「奇書珍籍吉原号」に、左の如く解説せり、」

大正11/05/04

大正11/04/21

大正11/05/16

成田山参詣、狂歌「甚兵衛のそばではねたる海老威も成田さんでは永代お手長」。
軽井沢に遊び、狂歌「名物はねぶかの尻の軽井沢人を追分くつかけの里」。善光寺にて、如来像の所有権訴訟の噂を聞き、狂歌「如来様はそしやうと迄は申されじ大

大正11/05/17

本願が大かんじんぞ」。

大正11/09/06 富士川下りに興じ、狂歌「富士川は日蓮托生かじか沢沈高沈木井でやつと身延す」。

大正11/10/24

『吉原大黒舞』（務 鹿田書店）

「吉原大黒舞」欠本一冊を鹿田より買入る、「奇書珍籍」第三号によれば、…（略）…と記されて居る、此書が一冊でも見付つたのは、誠に珍中の珍である。」

大正11/10/27

品川の細見（務 鹿田書店）

「鹿田より永田文庫の本の中にて、曾満人作の絵本を購入す、書名不明、品川の細見なり。」

大正12/02/xx

大蔵大臣市来乙彦に面会のため、20日間程度東京に滞在。狂歌「市来ても乙彦もな

大正12/02/05

『吉原大評判系にし染』（務 鹿田書店）

「鹿田にて「吉原大評判系にし染」四冊を買入る、…（略）…永田文庫の所蔵なりしものにて、始めより一冊欠本となり居りし様にはる、」

大正12/02/07

当代全盛高名細見（務 吉田書店）

「吉田書店にて「当代全盛高名細見」を、金二十銭にて購入す、」

大正12/xx/xx

春より神戸に転居。

神戸市葺合区上筒井通七丁目

大正12/04/10

水谷文庫本入札。

『吉原恋の道引』（務）

「吉原恋の道引」に関する記事余白に、墨筆

大正 12 / 05 / 10

大正 12 / 10 / 03

大正 12 / 11 / 10

冬、日光に遊ぶ。道中の句に「火を焚くや文挾の駅時雨して」。
この頃、俳句「裸々として冬山近しぶな落葉」「水鳥の足も凍るや冬の朝」の二句あり。

大正 13 / 01 / 27

大正 13 / 02 / 03

傾城新色三味線細見（務吉田書店）

書込「大正十二年四月十日水谷文庫本入札、代金一百八十円なりき」
「吉田書店より「傾城新色三味線細見」江戸の巻と云ふ、欠本一冊を購入す、」

『吉原大鑑』初篇上下二冊（務鹿田書店）

「カーマストラ」翻訳資料（務）

「京都大谷大学内に存する印度学会、其基金に充つるために、印度の古典「カーマストラ」を翻訳して有志者に配布したるが、幸にして一本を手にし侍たり、」

『五大力菩薩手鏡』（務細川書店）

「細川より「五大力菩薩手鏡」と云ふ書物を買入る、……珍書なり、元来二冊なりしと思はるれど、大阪の部を欠きたるは惜し、」

『八百八後家ノふし穴さがし』後の月見（務吉田書店）

「近頃吉田書店より同書（「八百八後家ノふし穴さがし」…青田註）並に前記の「後の月見」を購入す、代金二冊に

大正 13 / 03 / xx 『延寿清話』を創刊する。

大正 13 / 03 / 05

大正 13 / 05 / 10

大正 13 / 10 / xx

大正 14 / 01 / 18

大正 14 / 01 / 27

うた沢社主催・大阪朝日新聞社後援「江戸音曲大会」(於・大阪毎日新聞社)に『葉
うた虎之巻』二十枚を出陳。

大正 14 / 03 / 09

三田村鳶魚に『延寿清話』送る。

大正 14 / 05 / 22

三田村鳶魚に『延寿清話』送る。

大正 14 / 07 / 16

大正 14 / 08 / 17

細見(務) 杉本梁江堂)

大正 14 / 09 / 19

『吉原出世鑑』(務) 鹿田
書店)

大正 14 / 12 / xx

同年月現在、彩壺会会員。(昭和04年12月?)

て十二円とは高価と云
ふ可し、」

袖が浦細見記「亥の春改
正板」(務) 吉田書店)

吉原細見「文政二年秋板」
(務)

よし原細見記「明治廿八
年板」(務)

『拾遺枕草紙花街抄』(務
積徳堂)

巻末註記に、「積徳堂に
て金三十円、大正十四
年七月十六日 金十円昭
和十三年五月十五日」
とあり。

「杉本より無名の細見
一冊金五円にて購入す、
「島原細見」なりと称
するも、内容は島原と
些も合致せず。」

「吉原出世鑑」を二十
円にて鹿田より購入
す。」
住所は「神戸市上筒井
通七ノ九〇」

湯朝観明の案内で三田村鳶魚を訪問。

大正 15 / 03 / 16
大正 15 / 03 / 31

大正 15 / 08 / 15
大正 02 / 01 / 31
大正 02 / 02 / 08
大正 02 / 06 / 03
大正 02 / 02 / 08
大正 02 / 06 / 03

大阪市の書林俱樂部にて開かれた書史会主催虫干会において洒落本を出展。
鳶魚より『雑文穿袋』返却。

大正天皇御大葬に際し、俳句「土の香や多摩の陵春浅き」。

石川巖より異本吉原細見を送致さる。

高野辰之に『色里名取川』を貸与す（入手も比較的近い頃か）。『日本歌謡集成』第7巻に所収との予告あり。

高野辰之に『笑本板古猫』を謄写して寄贈す（入手も比較的近い頃か）。『日本歌謡集成』第9巻に所収との予告あり。

高野辰之に宛て「最近大阪で伊勢音頭の一本を獲得した」云々と知らせる。務作成の「二見真砂」対照表、「大阪音頭」正誤表が載る。次号附録（八）にて「二見真砂の補遺七篇」が務より高野宛に寄贈され掲載さる。

昭和 03 / 02 / 02

昭和 03 / 05 / 10
昭和 03 / 07 / 09

鳶魚に吉井太郎『淡路ト西宮ニ於ケル人形操ノ調査』送る。

鳶魚に『西宮昔噺』を送る。
大阪西区南堀江の書林俱樂部にて開催された「古書趣味の会」に「洒落本十種」を出展。

昭和 04 / 02 / 03
昭和 04 / 07 / 28

旅先の城崎にて「ほぐのひんと」（『古本屋』7）脱稿。

菊の園（務）

「江戸男色細見「菊の園」写本を金十五円にて購入す、……原本旧蔵者豊芥子の書入に……」

『色里名取川』

『笑本板古猫』

新宿細見（務 杉本梁江堂）

天保八年伊勢古市細見（務）

「本書もと表紙には「天保八年新版、古市細見花の菜、柳窓春門画」と記せり」

昭和04 / 10 / 22

鳶魚に原稿を送る。

昭和05 / xx / xx

湯朝竹山人に二十円貸与。狂歌「赤き袖の裏をかへして二十円つまはかさじと二浚面する」。

昭和05 / xx / xx

岡田某から壺入酒を贈られ、狂歌「壺入はかつたものぞと思ひしにまけてもろたと聞くもはづかし」、「酒なればお足とらるゝばかりなりおふてもろふて伊丹諸白」。

昭和05 / xx / xx

多田琴代と結婚か。世話になった岡田に、狂歌「つまことのしらべは松に甲斐ありて嘉納と聞くも御影なるらん」一首を贈る。

昭和05 / 01 / 11

浜口雄幸内閣の金解禁を祝して、狂歌「春袋あけて黄金をみちのくのうまとし聞けばはね上るらん」。

昭和05 / 01 / 12

白鶴酒造より年始としてひねり餅・酒粕を贈られた礼に、狂歌「ひねり餅きゝ酒などゝ百日の仕込をするはとじ(杜氏)の功なり」、俳句「かすくの心尽しやかすならぬ身にも賜はる白鶴のかす」の一首一句を贈る。

昭和05 / xx / xx

春、九州福岡に出向く石川巖を、往復とも神戸にて、菅竹浦とともに歓待。「忍頂寺兄からは軟派に関する珍書を食傷する程満喫させられたことは九大の失望を此所で医せられた観があつた。」

昭和05 / 04 / 08

吉田長祥より胃薬「友愛」を贈られた礼に、狂歌「UはEの薬でAといふ君の恵にOぞつれしき」、俳句「神薬のよろこび申せ雀の子」の一首一句を贈る。

昭和05 / 05 / 04

『愛書趣味』休刊号贈与の礼として、斎藤昌三に、「先達の昼寝気遣はし雲の峰」の一句を贈る。

昭和05 / 05 / 14

城崎地代値引の交渉に際して、狂歌「一割や薬師の顔を立てゝ引く二割は私利のくらしい観音」、「城崎は御苦勞さんにナアあんだ土地ふるはねば地ちん払はず」の二首あり。

昭和05 / 05 / 15

『清元研究』刊行。

昭和05 / 05 / 22

『清元研究』を鳶魚に送る。

昭和05 / 06 / xx

『清元研究』出版記念に、山口幸三郎等七名の有志より象牙の「淡路静村文庫」印一顆を贈られ、狂歌「賜はりし印は象牙の粹なれば普見簿冊のこしに押さなむ」。同印は仙台忍頂寺家に、贈呈目録は小野文庫⁴⁷⁶に現存。

昭和05 / 06 / 02

大谷正信(号、繞石)に『清元研究』を贈り、俳句「虫干にまがるもつらし唄の本」の一句とその英訳「At Summer Airing will bother and makes me sad The Book of

- Ballad」を添える。同書を江見某に贈るに際しては、「紙魚の家を作りかねてや老日永」「時鳥しやがもありけり唄の本」「つまへては忘るゝ本や虫払ひ」の三句と各句英訳を添え、江本某に贈るに「かみなりの姿みにくし不破の関」の一句とその英訳を添える。江本・江見は洲本中学同窓生か。
- 務、南木芳太郎に会見。
- 昭和05/06/04 大阪新聞夕刊に京阪神に於ける文献の研究者として、名を連ねる。「洒落本の研究―忍頂寺務氏」。
- 昭和05/08/21 辰馬保険争議の仲裁人伊賀歌吉に、「色人を相手に踊れ三津五郎」の一句を添えて『清元研究』を贈る。
- 昭和05/xx/xx 夏から秋にかけて城崎に遊び、「立つ秋をレヨンの財布緊縮す」「開山の肌をさしたる蚊の子かな」「此村のロマンスをなげ時鳥」の三句成る。
- 昭和05/xx/xx 石川巖に「赤本の長者になれやみのる秋」の一句を贈る。
- 昭和05/11/28 務書状が南木芳太郎のもとに届く。
- 昭和05/12/23 南木芳太郎、務宛に書簡を送る。
- 昭和05/12/25 南木芳太郎に湯朝竹山人宿所不明の旨を伝える。
- 昭和05/12/31 城崎に遊び、俳句「数え足らぬ黄金うらめし除夜の鐘」「年の瀬や黄金を惜む町の人」「鴻の湯や時雨を厭ふ湯女の足」成る。
- 昭和06/01/10 浜家熊雄より、差し押さえられた唐金火鉢の代わりに支那火鉢を贈られ、狂歌「ハツトリとわれたミヤケのから金にかへてたまはる支那火鉢かな」。
- 昭和06/01/15 異父弟誠一より寒雉子二羽到来、狂歌「踊らせて高麗雉子をあげまするナトリになればカン雉子といへ」を添えて、一羽を浜家熊雄に贈る。
- 昭和06/01/29 森西ウイリアムス合資会社解散。清算人となる。(昭和10/10/05清算終了)
- 昭和06/01/30 岡田から白鶴の酒粕を贈られて、狂歌「白さんのかすはねよげに見ゆるなり雪の膚のぼつとりとして」「白さんのかすみに酔ひし山下の春はみぎより又左りより」「鶯の糞なら顔へぬりて見ん鶴のかす故腹にのりせん」。
- 昭和06/02/14 『上方』第2号の礼として、狂歌「上方も二号といへばなまめかし天下茶屋では名題ものにて」を南木芳太郎に贈る。
- 昭和06/03/xx 長女出生。『易経』「日月麗乎天。百穀草木麗乎土。重明以麗乎正。乃化成天下」を

典拠に「麗子」と命名。狂歌「天に麗（つ）きあきらかなれと寿きて易の辞を名に与へけり」。

昭和06/03/02 城崎に遊び、俳句「冴えかへる腰のいたみや柳の湯」成る。

昭和06/03/23 野崎左文に、狂歌「穴こもりしても甲羅のかゞやきてきやうかに深くのこす足跡」の一首を贈る。

昭和06/03/31 江見某に、俳句「顔をかくす御屋敷さまや春の雨」の一句を贈る。

昭和06/04/25 斎藤洲司に「栄転のよろこびあれや桜鯛」の一句を贈る。

昭和06/04/27 横田某の次男逝去に寄せて、「いとし子は南無とばかりや四月尽」他四句の俳句を贈る。

昭和06/04/30 城崎に遊び、「一の湯の湯女見に行かん春の宵」「鶴を見に但馬の旅や春寒き」の二句成る。

昭和06/05/xx 神戸陳書会第三回例会にて、清元に関する講演をおこなう。

昭和06/05/30 浜家熊雄義弟の結婚祝として、「この蚊帳にあふるゝ迄やめをと鶴」の一句と蚊帳を贈る。

昭和06/07/xx 「兵庫ぶし目録」に関する調査を行う（対象…太田文庫、禾舟文庫、静村文庫、山村文庫）

昭和06/08/07 陳書会会員として会員名簿に名を連ねる。

神戸市上筒井
通七丁目九〇

居所は名簿による。

昭和06/08/30

昭和06/09/11 前川某へ「傾城の話つきせぬ夜長かな」の一句を贈る。

昭和06/10/11 「秋風や白き鼻毛に老を知る」「金のなき但馬の人や秋の雨」の二句成る。また、この頃、城崎に遊び、「霧の海かすかに見ゆる灯火をそれぞと拝む温泉寺山」の一首成る。

昭和06/10/13 「天よし」にて夕食、「秋もやゝさよりの味の細かなる」「鰻汁に人を誘ふや夕時雨」の二句成る。

昭和06/10/25 某人に「恋やいつこロイド眼鏡に秋早き」の一句を添えて眼鏡を贈る。

『宮ふぬり吾嬢のつとめ』務
梁江堂（

昭和06／11／13

高鍋某に「賢人の冬こそもりして須磨の里」他三句を贈る。

昭和06／11／17

高鍋某に「団欒の夜長を踊る子供かな」の一句を贈る。

昭和06／11／21

浜家熊雄に「行厨に日影みじかき腹かげん」の一句、石川巖に「酔人の羽織うらやむ案山子かな」「葦の花を吹き折りてまた秋のゆく」「桑の葉の黄なるもわびし冬近き」「蕉葉に言たてゝ又秋の行く」の四句を贈る。

昭和06／12／xx

横山伝次郎の逝去の報に接し、狂歌「横山にチブスの虫が取つきて息も伝次郎フクマクるしき」一首成る。

昭和06／12／12

浜家熊雄の代理として、川畑某女に「踏まれてもまた来る春に咲き出でん御空のさだめ君を忘れし」他五首を贈る。

昭和06／12／16

全快内祝として岡田より風呂敷を贈られ、狂歌「ふるしきの包むに余る喜びや手のまひ足の舞ひも忘れて」を返送。

昭和07／01／xx

神戸住所変更。

神戸市真合区
上筒井通七丁
目九〇

昭和07／01／01

申年にあたり、諸式高騰を、狂歌「ものゝねは高まが原のかみまかせ黄金の幣も見ざる年にて」と詠む。

昭和07／02／05

津村秀松に「春の日や麗らに光る庭の石」「飯島花月に「春をまつ大樹のかけを掃きにけり」の一句を返句として贈る。

昭和07／02／07

岡田某より白鶴の酒粕を贈られて、狂歌「酒のみにかすと申して給はりし鶴の粕こそ酒の実(ミ)にして」。

昭和07／03／03

板倉某(号、無底)の司法代書士停止に、狂歌「道楽をしはうだい書の板倉に底が無ければ金も貸されず」。

昭和07／04／20

浜家熊雄義妹木村氏の出産にあたり、俳句「初の子の春や鶴亀松竹梅」「軍国の春に寿ぐ嫡子かな」の二句を贈る。川島右次に「富貴もあり冥加もあれや草の春」の一句を贈る。

昭和07／04／29

神戸大倉山楠寺境内に高田蝶衣句碑「行者のぼりし足跡よりぞ雪とくる」建立、昔を追憶し、「春やむかし旅に興せしを蝶衣仏」の一句を詠む。北摂池田に遊び、「春もやゝ呉服の里に忍ぶ恋」「麗人の指や小鮎の塩かげん」の二句を得る。

- 昭和07/04/30 大丸事件に際し、俳句「花に嵐老鶴の巢に歎きあり」。
- 昭和07/05/xx 鳶魚の談話に、鳶魚の師は佐藤牧山、その享年九十五と聞く。また、当年、水谷不倒七十五歳、坪内逍遙七十四歳、笹川臨風六十三歳、伊原青々園六十三歳で、鳶魚自身も六十三歳と聞く。
- 昭和07/05/05 江口某次女の出産祝に、「寿を申す御家や八重霞」の一句を贈る。
- 昭和07/05/13 東京市長永田秀次郎（号、青嵐）に、「江都一の市長をほめよ揚雲雀」の一句を呈す。
- 昭和07/05/13 岡田某の快復につき、医師原田某に「友の病あやめわかぬ日のありし」の一句を添えて礼状を認む。
- 昭和07/05/15 京都賀茂の葵祭を拝観し、「違あれやあふひ祭の人の数」「扇流す西の祭や嵐山」の二句を得る。
- 昭和07/06/01 鳶魚より細見図返還。
- 昭和07/06/06 三宮で鳶魚を迎え会食。（川島右次、横田照二、菅稲吉）
- 昭和07/06/07 鳶魚見送り。鳶魚に『江府年中行事誌』送る。
- 昭和07/06/10 きぬ糸の婚姻に際し、「様は百まで生田の森の楠若葉」の一句を贈る。
- 昭和07/06/25 川畑某女にクサヤ干物の礼として、「鳥鱈の味昼寝の恋も消ゆるとき」の一句を贈る。また、同じころ、同女に、浜家熊雄の代わりとして、「文殻の煙の行方したひとつ淡路島山あかずながめぬ」とけしなく又いとほしき淡路人我には断えぬ思出のある」の二首、柿の香合と盆の礼として、「かう合の柿色なるもはづかしや盆の月ほど丸く得納めで」の一首を贈る。
- 昭和07/07/11 富山の木村省三より子供の写真を送られた返書に、「鵬の子の飛ぶ日をまつや夏の峯」の一句を贈る。
- 昭和07/07/19 鳶魚を三宮で出迎え、多田宅、午後吉井太郎を訪問。鳶魚に『武庫の川千鳥』貸す。
- 昭和07/07/20 菅と鳶魚を訪問し、石割を訪う。夜、満韓旅行帰りの鳶魚の歓迎会を兼ねた陳書会例会を開催。五十崎夏次郎、南木芳太郎、太田睦郎、川島右次ら席上にあり。鳶魚の談話に、医師饗庭東庭は饗庭 篁村の祖先にあたると聞く。
- 昭和07/07/22 鳶魚同道にて宮武省三を訪問。

昭和07/07/23

鳶魚、多田同道。

昭和07/07/28

野崎左文より団扇の画の暑中見舞いを送られた返書に、「絵にかいた団扇の風もなつかしくあつき情をあふぎ見るなり」の一首を添える。

昭和07/08/12

鳶魚より『武庫の川千鳥』返却。

昭和07/09/xx

大谷正信(号、繞石)より『繞石句集落椿』を贈られ、俳句「拝領の句集うれしき夜長かな」。

昭和07/09/04

「名曲鑑賞 第十一回 清元「御名残押絵交張」の解説者としてラジオに出演。

昭和07/09/05

江戸銀で鈴木某と会食し、「勘八の料理語らん江戸の秋」「平目のさしみ故郷を語る秋なりき」の二句を得る。

昭和07/09/08

鳶魚を訪問、不会。

昭和07/09/15

メロン鑑賞会の礼として、岡田に「おくさまのつくるメロンは天下一かゞみにうつる鼻の高さよ」の一首を贈る。

昭和07/09/23

下呂温泉での同窓会に不参の旨、狂歌「ひだの湯に下呂といふ名もいとほしやろもじゆもじと我は覚えて」一首を添えて申し送る。

昭和07/09/30

日和山に遊び、「帆の見えぬ日はさびし秋はれて」の一句を得る。

昭和07/10/19

某人に大手饅頭を貰い、俳句「秋まつり村には古き見世のある」。

昭和07/11/01

浜家熊雄に「白いかの酢みそに話す冬となり」の一句を贈る。

昭和07/xx/xx

木村省三より白柿を贈られ、俳句「白柿に越のたよりや冬こもり」。

昭和07/12/16

洛北の藤井紫影宅を訪ね、『吉原大豆俵』を借りる。

昭和07/12/19

鳶魚に『心中二十種』送る。

昭和08/03/11

木村末子の婚礼として、「様と契る末は八千代の玉椿」「かなふとは末頼もしき辻占やせーさんに誠さゝげて」の一句一首を添えて椿の花模様様の帯地を贈る。

昭和08/03/12

藤井紫影、頼原退蔵を訪問、『三味線花実集』の話あり。

昭和08/04/22

鳶魚より著書患与。

昭和08/04/24

海軍大佐高鍋三吉に「ほがらかにうたふ春なり須磨の里」の一句を贈る。

昭和08/05/10

山本英子・小林十則の婚姻に、狂歌「初の夜にわるゝもうれし真寸鏡とつき合せてまるき契りぞ」「十則のおきて守りて家を興し世にも英でよ小林の人」の二首を贈る。

る。

昭和08 / 05 / 14

『遊女懷中洗濯』江戸の
卷(務 吉田書店)

「遊女懷中」フトリコ
洗濯」五冊、宝永年間
の版なりと「日本小説
年表」に記さる。今度
吉田書店よりその中の
江戸の巻一冊を購入
す。」とあり。

甲府細見(務 吉田書店)

昭和08 / 05 / 18

小林十則に「新妻もこもる春なり鶴の宿」の一句を贈る。住吉大社御文庫を見て、「御文庫は幾世栄えて松の花」の一句を得る。

昭和08 / 06 / 05
大丸副支店長深堀某の葬儀に際し、「安中の人甲へや時鳥」の一句を詠む。

昭和08 / 06 / 16
鹿田静七の逝去に、俳句「思ひ出の左筆も悲し落し文」。

昭和08 / 07 / 24
鳶魚へ『淡国通記』送付。

昭和08 / 09 / 21
駒田彦之丞より『侗齋文集』下賜、「うれしさに繙く文も夜長にて」の一句を得る。

昭和08 / 10 / 11
藤井行雄の長男出征中の逝去に接し、「子に思ひ残してつばめ帰らん」の一句を詠む。

昭和08 / 11 / 07
神戸港祭に遊び、「津の七野街に成りすゝき名に残る」の一句を得る。『花月随筆』

小野文庫 185

寄贈の礼に、信州上田飯島家に「炉ひらけば老翁あますが如くなり」の一句を贈る。

昭和08 / 11 / 17
大谷正信(号、繞石)広島で逝去、追悼に「経をよむ鳴の涙も新たなる」の一句を詠む。

昭和08 / 11 / 25
前川清二に「瑾言の腸にしむ海鼠かな」の一句を贈る。

昭和08 / 12 / xx
「サラリーマン」の歌題で、狂歌「サラリくかねて積らぬ笹の雪さゝなく鳥の足に消えつゝ」「月きふでつるくくてんと舞ひながらまたせん年の風雲をまつ」の二首成る。

昭和08 / 12 / 23
「春はござれ皇子あもります東海に」「天つ日高寿詞に栄えて富士の雪」の二句成る。

昭和09 / 01 / 24
東京転居につき、陳書会同人有志の発起で、神戸市栄町二丁目の東月にて送別会が

催される。出席者二十余名。俳句「出代りやお江戸にうとき島男」。

昭和09/02/xx

英十三と面会、一中節・河東節・清元における合いの手に関して談話。

昭和09/02/xx

高岸拓川と面会。三番叟の西蔵(チベット)伝来について、河口慧海より先に佐々木照二が明治三十九年五月二十五日付「二六新報」に発表していたことをめぐり、談話。

昭和09/02/01

城崎の某人に「東なる江戸の浄るり忘れても願へ薬師の瑠璃の浄土を」の一首を贈る。

昭和09/02/03

東京勤務に伴い転居。(昭和12/03) 出立時の俳句「出代りや汽車にて急ぐ東海道」「都入りの今宵はうれし春の宵」。

昭和09/02/05

上京、鳶魚を訪う。東京での仮寓を菊富士ホテルに定める。

東京市本郷区
菊坂町菊富士
ホテル 東京
市牛込区市ヶ
谷本村町三十
五番地

昭和09/02/06

某人に「松かげに寒さをいとへ鶴の宿」の一句を贈る。

昭和09/02/11

浜家熊雄に「佃煮に小魚をあさる春寒き」の一句を添えて佃煮を贈る。

昭和09/02/18

西鶴輪講会参加。文反古一。鳶魚、木村捨三、間民夫、森銃三、野々村戎三、柴田泰助。

昭和09/03/xx

東京出遊を記念して『潮来舟』を著す。知人に配布せんため。

昭和09/03/07

合資会社ギル商会設立に従事。

昭和09/03/23

家族を迎えに神戸に下る。夜、東京駅で坂井華溪と偶然遭遇し、寝台列車に同乗、食堂車で痛飲する。

神戸

昭和09/03/25

家族を連れて東京へ出発。見送りの人々、小坂・松村・梶原・岡松・横田・西尾・

東京

「忍頂寺務略年譜」(小野文庫⁴⁷⁴)では、東京在勤を昭和11年3月までとするが、誤りか。書簡の宛先住所等によって改める。

仮寓先の菊富士ホテルでの句か。

- 昭和09/05/xx 高鍋・浜家・木村・藤谷・加納・岡田・江見・斎藤・木村・忍頂寺・多田・藤井・中村・菅・長岡・堀本・宮崎・笹山。
- 昭和09/08/26 愛庵会（神戸高等商業学校初代校長水島鏡也顕彰会）への入会を断り、一句「煎餅のしめるつらみや五月雨」。
- 昭和09/09/09 陸軍大佐高鍋三吉に「初秋や淡路の人の帰り行く」の一句を贈る。
- 昭和09/09/23 鳶魚を訪う。半日閑話。
- 昭和09/10/xx 鳶魚来。『潮来舟』渡す。
- 昭和09/10/xx 高岸拓川に、「眼にうつる故郷の山や茸の味」「松茸に勇健とかく便りかな」の二句を添えて松茸を贈る。
- 昭和09/12/xx 横田照二に、病氣見舞として「長養の秘策もありて菊の露」の一句を贈る。
- 昭和09/12/xx 同年2月上京後、10ヶ月の間に数多の書物入手。そのうちの珍なるものが「朱雀遠目鏡跡追」。
- 昭和09/12/31 「この春もめでたや千代の小豆餅」の一句を添えて、高岸拓川に年始の礼として餅を贈る。
- 昭和10/xx/xx 淡路由良の人に「短夜の夢にも通へ沼島女郎」「瀬多川や舟を流して蛭とる」の二句を贈る。
- 昭和10/01/07 大内兵衛兄山口敬堂の長寿を祝い、「古稀に喜に米も祝へや長き春」の一句を贈る。
- 昭和10/01/09 横田照二に「冬山や穂高の神に誘はれて」の一句を添えて絵葉書を送る。
- 昭和10/01/24 河本某へ「紙魚の喰むに任せてうれし古法帖」の一句を贈る。某人へ宛てた慰問袋に「鉄砲の凍る寒さを語りけり」の一句を記す。
- 昭和10/01/29 川島右次に「売りものは霞の衣香の宵」の一句を添えて絵葉書を送る。
- 昭和10/02/17 柏木潤三を訪問し、「みむす日の神のみたまになれる身をはかなきかずに思ひ捨めや重胤」と書した鈴木重胤の軸物一見。

『朱雀遠目鏡跡追』巻一

『色里迦陵頻』吉原下職原『八曲篋掛絵』(務)
 () 『新道行揃』千朴秘曲集『都羽二重懐中扇』も
 同時期か？

昭和10/05/xx

『俳諧志都織』(務 仲野
安雄翁旧蔵書入札)

昭和10/06/08

野崎左文逝去に際し、狂歌「なむあみだ南無なみたにて拜むなりお経のあとは狂歌まじりに」と詠む。

昭和10/07/14

鳶魚を訪う、不会。夜、鳶魚来る。

昭和10/09/15

午後二時、鳶魚を訪う。閑談、九時に及ぶ。

昭和10/09/21

神戸行、二十四日、東京に戻る。

昭和10/10/xx

三田村鳶魚と談話。元文年間の堀尾新九郎守保は耳鳥齋の先蹤という。

昭和10/10/10

高岸拓川に「きび餅に胡国の冬の早かりき」の一句を添えて高粱餅を贈る。

昭和10/10/18

図書館に樹下快淳を訪問。

昭和10/10/31

不在中、鳶魚来。

昭和10/11/10

鳶魚来る。瓦版十点貸す。

昭和10/11/15

鳶魚へ瓦版一点届ける。

昭和10/12/xx

高岸拓川に「健啖の客うらやまし年忘れ」の一句を贈る。

昭和10/12/xx

横田照二に「団樂にユハイムの菓子や春近き」の一句を贈る。

昭和11/xx/xx

「市川団十郎関係の書物を、ここ二十年余心がけて蒐集」

『八日目華』(務) (先
年は『遠々みます』『しも
ふさ身旅喰』を得る)

昭和11/01/xx

題「海上雲遠」の歳旦吟「大海を指さす神や初日影」。

昭和11/01/19

田中治之助こと英十三と、一中節・河東節の節付や、松本交山・石井仏心・石井柏亭等の江戸画人をめぐって談話。

昭和11/01/22

田中治之助こと英十三に、先日(の礼として)「獅子舞に鱸酒たまはる遊びかな」の一句を贈る。

昭和11/01/26

「蝶衣の幼きころ」執筆。

昭和11/01/28

鳶魚来る。瓦版十一返却。『下職原』の写しを貸す。

昭和11/02/01

「蝶衣の幼きころ」、『ひむろ』掲載。

- 昭和11／02／16 鳶魚来る。『下職原』返却、『呼子鳥』、『大豆俵』（ともに写本）貸す。
- 昭和11／02／22 鳶魚来る。『呼子鳥』、『大豆俵』返却。三茶三幅一對を貸す。
- 昭和11／03／01 鳶魚来る。ハアロツト氏への問い合わせを頼まれる。『遊所甚孝記』、『全盛名所鑑』、『三茶三幅一對』、『傾国乱髪』貸す。
- 昭和11／03／04 鳶魚来る。神戸よりの来書の訳を頼まれる。『全盛名所鑑』、『三茶三幅一對』返却。
- 昭和11／03／05 横田照二に「戒庵の都大路や春寒き」の一句を贈る。
- 昭和11／03／06 夜、鳶魚来る。『梅の春』を三絃にかかると英訳せし話をする。
- 昭和11／03／15 鳶魚、山田清作来る。『いとなみ六方』、『色男栄万歳』貸す。
- 昭和11／04／23 木村照子の婚礼に、隆達古意にならって「様はいづる日春の庭に照る心うれし」の一句を贈る。
- 昭和11／05／05 鳶魚来る。『遊所甚孝記』、『傾国乱髪』返却。『吉原下職原』、『新やくほらい』、『十二段』貸す。
- 昭和11／05／14 鳶魚来る。『吉原下職原』、『新やくほらい』、『十二段』返却。
- 昭和11／05／26 鳶魚を訪つ。延享細見借りる。
- 昭和11／06／06 鳶魚を訪つ。不逢。延享細見返す。
- 昭和11／06／10 高岸拓川に「麦秋や八つ茶の菜に山椒こぶ」の一句を贈る。
- 昭和11／06／14 夜、鳶魚来る。瓦版二点返却、新たに五点貸す。
- 昭和11／06／15 鳶魚より、せつ女をして瓦版返却。『洞房古鑑』、『宝曆細見』、『延享細見六冊』を貸与せらる。
- 昭和11／07／01 鳶魚を訪つ。細見返す。
- 昭和11／08／15 鳶魚より貸借の『洞房古鑑』、『膳』し終わる。
- 昭和11／08／18 鳶魚を訪つ。『洞房古鑑』返す。『吉原規言証文』、『酔問漫語』を借りる。『吉原六方』返却。
- 昭和11／10／04 夜、鳶魚を訪つ。『竜宮船』、『淡路詞』、『富士の袖』貸す。『淡路詞』はその場で鳶魚書写。
- 昭和11／10／10 高岸拓川逝去の報に接す。

昭和11/12/xx

歳暮吟「凧や石の舗道に吹きすさむ」「凧や蓑虫の巢の顛倒す」「毎日に逐はれて遂に年暮るゝ」「犬小屋に松飾りする翁かな」「松飾り今日無事の住居かな」「大道の靴にふまるゝ落葉かな」「大江戸の名残や庭に白椿」。

昭和12/xx/xx

父の墓参のため淡路志筑へ帰省し、「故郷は仏ばかりや冬の月」の一句あり。
鳶魚より細見一冊、『竜宮船』四冊、『題詠詞』一冊返送。鳶魚書写の『露殿物語』借りる。

昭和12/02/15

鳶魚に天明細見について書を送る。

昭和12/02/27

鳶魚を訪う。『露殿物語』返す。享保細見借りる。

昭和12/03/07

鳶魚へ裏打ち用の紙見本送る。

昭和12/03/09

八重を連れて鳶魚来る。『甚孝記』を遣る。

昭和12/03/28

東京を去り、帰郷。その前に鳶魚を訪う。

昭和12/03/29

神戸市灘区に転居。(灘区在は昭和20/08頃まで)「思ひ出の唄もありなん帰る雁」「春未し小鳥の餌の乏しくて」「顧みてほゝるむ人や朧月」の句あり。

神戸市灘区篠原南町三丁目四七五ノ三

昭和12/05/21

鳶魚へ手製の煮山椒送る。

昭和12/07/17

鳶魚へ吉原の長屋について問い合わせる。

昭和12/07/19

鳶魚より吉原の長屋について返書。

昭和12/08/01

鳶魚へ書。『江戸自慢』『切見世さんけ』同封。

昭和12/08/02

鳶魚へ書。

昭和12/08/24

鳶魚へ『翠箔志』送付。

昭和12/08/27

鳶魚より『翠箔志』帰り来る。

昭和12/09/xx

御影町の前川清二邸で開かれた陳書会例会に、最近入手した『みちのかたち』を出品。そのまま前川清二に貸与。

昭和12/09/04

鳶魚へ『金銀御製造扣』『陳書』『神戸事变と滝善三郎』郵送。

昭和12/09/16

鳶魚より『御製造扣』『切見世さんけ』細見返送。調べ物一綴送られる。

昭和12/09/24

鳶魚へ『価帖独案内』『仮宅色歌仙』、値段付安永細見二冊、天明細見一冊送付。

『みちのかたち』(務)

昭和12/09/28 鳶魚より貸与の物返却。

昭和12/11/xx 坂井華溪に「落葉低く庭に舞ひあり留守にして」「横を切る女を恨む夜長かな」の二句を贈る。

昭和13/03/19 鳶魚へ珍書四点送付。

昭和13/04/09

鳶魚へ木芽つくだに贈与。

昭和13/04/18

昭和13/05/11

昭和13/05/31

昭和13/06/06 鳶魚より珍書四点返送。

昭和13/06/29 鳶魚へ『御為替方月勘定之留』『白門新柳記』送付。

昭和13/07/06 鳶魚より洪水見舞い。

昭和13/07/09 鳶魚へ無難の返書。

昭和13/07/26 鳶魚へ聖徳太子の画葉書。

昭和13/08/08 鳶魚より本二冊返却。

昭和13/09/01

昭和13/10/16 鳶魚へ十九日の神戸陳書会への参加を問う。鳶魚十九日に東京発ゆえ無理との由。
昭和13/11/12 在関西の鳶魚を訪う。

『久恒翁採存』(務 神戸市立図書館)

『阿淡譚叢』『潮来舟』『武家義理物語輪講』『心中くどき二十種』『吉原下識原』他、計15点(務 神戸市立図書館)

『蔵春洞書目解題』『校訂播姫太平記』『近代歌謡上方踊口説集 目次』他、計20点(務 神戸市立図書館)

『横浜往来』『紅蘭遺稿』他、計14点(務 神戸市立図書館)

- 昭和13／11／26
 鳶魚へ『北里通』、『繁鶴心中』を送る。
- 昭和13／12／13
 鳶魚より『吉原通』返送。『富士の袖』借りる。
- 昭和14／01／14
 神戸陳書会・例会に出席。(於・御影前川邸)
- 昭和14／03／10
 親戚の子供の高等学校への入学のため上京。夜、鳶魚を訪う。馬琴作『北国順礼便方』貸す。
- 昭和14／03／15
 鳶魚經由で山田氏より『椎園』三冊届く。
- 昭和14／03／16
 鳶魚より十円返金。残り七十円なり。
- 昭和14／03／20
 鳶魚へ江戸図彙の挿し絵候補送る。
- 昭和14／03／26
 浜家熊雄が鳶魚を訪うに手紙を書く。
- 昭和14／04／xx
 『江戸読本』世話人(笹本寅)来訪、同誌連載「江戸図彙」の材料数点を借る。
- 昭和14／04／05
 鳶魚へ上京の由、書を送る。
- 昭和14／04／06
 浜家氏子息同道にて鳶魚を訪う。
- 昭和14／04／07
 野々村氏同道にて鳶魚を訪う。
- 昭和14／04／28
 鳶魚へ書物五点。
- 昭和14／04／29
 鳶魚へ木のめの佃煮送る。
- 昭和14／04／30
 鳶魚へ『清元研究』原稿送る。
- 昭和14／05／xx
 安井某に、杉の実の礼として「母の里に来て杉の実をなつかしむ」の一句を贈る。
- 昭和14／05／13
 鳶魚より新刊一冊惠与。
- 昭和14／05／22
 鳶魚へ『清元研究』七遊談』送る。
- 昭和14／05／30
 鳶魚より書一冊。
- 昭和14／06／02
 鳶魚へ木の芽の佃煮送る。
- 昭和14／06／21
 鳶魚より返金。残り五十円。

『写本兵庫くどき』校本
 兵庫くどき』(務)神戸市
 立図書館)

昭和14/07/02

鳶魚へチャラ金二片送付。

昭和14/07/24

『白山嵐』他、計4点(務
神戸市立図書館)

昭和14/08/23

鳶魚へ江戸図彙、間に合わせ由申し送る。

昭和14/08/27

鳶魚へ百足小判等郵送。

昭和14/09/12

合資会社ギル商会出資金一万元有限責任社員となる。

昭和14/09/14

鳶魚へ『潮来舟』送る。『中古風俗志』のこと申し送る。

昭和14/09/17

鳶魚より『遊婦里会談』『志家位名見』『百人一首』『都々逸つゑ』『北国順礼唄方便』『仕方俳諧』返却。

昭和14/09/28

鳶魚へ『清元研究』原稿送る。

昭和14/10/22

鳶魚より『七遊談』一冊、『吉原大黒舞』一冊返送。

昭和14/10/30

鳶魚へ書。来月十日上京。

昭和14/11/10

上京。

昭和14/11/11

鳶魚を訪う。浜家熊雄同道。

昭和15/xx/xx

白地手形の訴訟に勝利し、『勝瑞のやきものはもと白地にて焼けた手形の跡を眠平』の狂歌を田中菜に示す。

昭和15/xx/xx

この年、『坂八里行者の宿や蕎麦の花』『遠近の山時雨行く午下り』『サーカスの小屋に時雨るゝ一日かな』『小冠者の魚呼ぶ声や夏の朝』『夏山や虹の尾をふむはかりごと』の五句成る。

昭和15/01/23

『流行吾妻唄』他34冊(務
神戸市立図書館)

昭和15/02/02

鳶魚より『歌野二嬢』、享保十四、十五年細見の問い合わせ。

昭和15/02/28

鳶魚へ『女意亭有嘶』『男女不躰形』『諸国色里帖独案内』貸す。

昭和15/03/04

鳶魚より三冊返却。

昭和15/03/06

いたこ唄本15冊、洒落本
10冊、都踊り2冊、『誉
の魁』2冊、題箋大中小

昭和15/03/22 夜、鳶魚を訪う。蜀山人の『会計私記』貸す。

昭和15/04/xx 神戸中央土地建物株式会社取締役となる。

昭和15/04/05 鳶魚へ享保細見二冊貸す。

昭和15/04/19

昭和15/05/09 鳶魚より享保細見二冊返却。

昭和15/06/12 神経衰弱の気味なるを鳶魚へ書き送る。

昭和15/12/xx 「竹外と雲如」(『陳書』12)脱稿。

昭和15/12/30 小野弘・麗子の長男として初孫恵嗣誕生。

昭和16/xx/xx この年、「大農に褒状賜はる日鶴の来る」、「霜の朝湯殿にくさめ響きけり」、「小春日や小指に残る温泉(ユ)の香り」、「春雨や小湯女の髪のとけしなき」、「宣戦の詔天にあり鶴の舞ふ」の五句成る。

昭和16/xx/17

昭和16/05/20

昭和16/06/01

昭和16/08/24 鳶魚へ神戸商大の大黒長左衛門文書について返書。

昭和16/09/07 鳶魚へ『銀座役所向図』送る。

昭和16/09/25 鳶魚、神戸へ、忍頂寺務宅へ投ず。旧債八十円、残り三十円を鳶魚より務へ返却、完済。『大成経』購入の由。

昭和16/09/27 鳶魚、帰る。

昭和16/11/12

150枚(務 三村書店)

『狂歌百人一首』他48冊
(務 神戸市立図書館)

『凌霜会員名簿 昭和16
年用』、『車窓の日本』(務
神戸市立図書館)
『有馬ぶし』他、計22部
(務 神戸市立図書館)
『晃山遊草』他、計27点
(務 神戸市立図書館)

『出雲に於ける小泉八雲』
他、計5点(務 神戸市)

昭和16/11/29 鳶魚より新刊患与。

昭和17/01/01 歳旦吟「大捷の御稜威かしこし初日影」「古傷の痛む夕さり雁渡る」「監視哨雁の渡るを報じけり」「初日影寿詞」(ヨリト)に「よむ淡路島」。

昭和17/01/07 「一節稀観本」(陳書) 13 (脱稿)

昭和17/04/21 鳶魚より手紙。『緯学源流興廃考』につきて。

昭和17/04/27 小野弘・麗子の次男として孫晃嗣誕生。「男山と祈りし児なり楠若葉」の一句を得る。

昭和17/05/xx

昭和17/06/09 鳶魚へ返信。

昭和17/06/10

昭和17/07/xx 神戸史談会の会員となる。

昭和17/09/15

昭和17/10/15 「頼三樹三郎の書翰」(陳書) 14 (脱稿)

昭和17/10/21

昭和17/11/08 神戸陳書会・例会出席。(於・妙法寺)

立図書館)

『The Journal of the Polytechnic Society』(務 神戸市立図書館)

『大坂に関する書籍展覧会目録』(務 神戸市立図書館)

務の住所は「神戸市灘区篠原南町三丁目四七五ノ三一」

『篠原水書誌』(務 神戸市立図書館)

『狂歌阿淡百人一首』増補『長歌絃曲舞しらべ』『どどいつ葉唄節用集』『声くらゐ』第二編『俗曲集』他4点(務 神戸市立図書館)

- 昭和18／01／24 鳶魚へ『陳書』十四輯送る。
- 昭和18／03／xx この頃、「春の水鳩の古巢の流れよる」「芋化して鰻にやならむ春の水」の二句成る。
- 昭和18／04／15 鳶魚へコウナゴ送る。
- 昭和18／06／27 鳶魚へ『物はなし』三冊送る。
- 昭和18／09／17 永田秀次郎(号、青風)逝去に際し、「大樹枯れて淡路の秋のさびしさよ」と詠む。
- 昭和18／10／xx 淡路志筑にて「待避とよんで孫走りくるや萩の庭」の一句成る。
- 昭和18／10／30 中村幸彦と同道、京都智勝院に投宿中の鳶魚を訪つ。ともに城崎へ出立。
- 昭和18／11／xx 本月中書写の書物『万里砂』『妙心寺出世式次第覚書』『大灯国師行状』『法淵繁興略記』『正法山出世位階等法式略記』『玉鳳院塔主職法服一条願書写』『繪旨頂戴趣意定書』
- 昭和18／11／03 智勝院の鳶魚を訪い、五日夜まで滞在し仕事を手伝う。
- 昭和18／11／06 智勝院の鳶魚を訪い、七日夜まで滞在し仕事を手伝う。寒天を贈る。
- 昭和18／11／13 智勝院の鳶魚を訪い、十四日夜まで滞在し仕事を手伝う。寿司の素を贈る。
- 昭和18／11／21 智勝院の鳶魚を訪い、仕事を手伝う。菓子を贈る。
- 昭和18／11／23 智勝院の鳶魚を訪い、仕事を手伝う。
- 昭和18／11／29 (鳶魚に小豆を贈り、ともに)陽明文庫に行く。城崎へ出立。
- 昭和18／12／xx 本月中書写の書物『侍真寮略須知』『樹下散稿』『紙衣膳』(三分の一)
- 昭和18／12／03 智勝院の鳶魚を訪い、仕事の打ち合わせ。『侍真寮略須知』膳写始める。
- 昭和18／12／04 鳶魚帰京。
- 昭和18／12／07 南陵と鳶魚、雑用金五〇円送り来る。
- 昭和18／12／08 鳶魚より書(五日付)。陽明文庫蔵『於御前演舌仕候心覚』、法然院蔵二点、雑萃院蔵『紙衣膳』を至急書写の旨申し越す。
- 昭和18／12／10 鳶魚より書(六日付)。
- 昭和18／12／11 南陵より法然院費用として金五〇円到着。智勝院を訪問、天祥院面会し仕事打ち合わせ。祝儀および茶一斤宛贈る。
- 昭和18／12／12 『侍真寮略須知』返却し、写本を渡す。天祥院の中村を訪い、『樹下散稿』『万里砂』

同日記末尾に「雑華院
渋谷鼎山殿」とあり。

同日記末尾に「天祥院
釈浩堂殿」とあり。

- 昭和18/12/13
『樹下散稿』謄写始める。
を借りる。鳶魚と南陵へ書。
- 昭和18/12/15
鳶魚へ書。天祥院のこと。
- 昭和18/12/16
鳶魚より書。
- 昭和18/12/18
天祥院、雑萃院至りて教会所に宿泊。寿司の素を贈る。中村来訪。
- 昭和18/12/19
雑萃院にて『紙衣膳』謄写始める。
- 昭和18/12/20
『樹下散稿』一、二巻謄写了。三巻欠にて、本日より四巻に着手。中村書写『於御前演舌仕候心覚』を鳶魚に郵送。
- 昭和18/12/21
鳶魚より『西力東漸本末』一冊送り来る。
- 昭和18/12/23
鳶魚へ写し物一〇枚(中村氏写)送る。
- 昭和18/12/25
天祥院、雑萃院を訪問。片栗粉および祝儀を贈る。
- 昭和18/12/26
天祥院、雑萃院を訪問。『紙衣膳』謄写す。『樹下散稿』返却。写本二冊渡す。天祥院より書、紙二百枚受け取る。
- 昭和18/12/26
小野弘・麗子の三男として、孫介嗣誕生。
- 昭和19/xx/xx
この年、「腹やせて路溝にあへく蛙かな」の吟あり。
- 昭和19/01/xx
本月中書写の書物『万里砂』二冊『紙衣膳』(三分の二)『唱語故実』一冊。
鳶魚より書。
- 昭和19/01/02
天祥院を訪問。寒天および祝儀を贈る。雑萃院にて『紙衣膳』謄写す。
- 昭和19/01/05
天祥院を訪問。小豆を贈る。雑萃院にて『紙衣膳』謄写す。
- 昭和19/01/09
雑萃院にて『紙衣膳』謄写す。
- 昭和19/01/14
天祥院を訪問。柿および祝儀を贈る。『万里砂』貸出。雑萃院に行く。
- 昭和19/01/16
鳶魚より書(十二日付)。
- 昭和19/01/18
天祥院を訪問。牛肉および祝儀を贈る。雑萃院に行く。
- 昭和19/01/23
鳶魚より書。
- 昭和19/01/24
鳶魚、務に宛て「教化」を発送。
- 昭和19/01/24
鳶魚、務に宛て「教化」を発送。

- 昭和19/01/29 天祥院を訪問。ハツタイ粉を贈る。『万里砂』二冊返却し、同写本二冊渡す。紙受け取る。『万里砂』巻三、巻四貸出。雑萃院『紙衣膳』謄写した。
- 昭和19/02/xx 本月中書写の書物『万里砂』二冊、『虻蜂録』(二分の一)
- 昭和19/02/06 雑萃院に行き、『紙衣膳』校正了。天祥院にて鳶魚宛紙二百枚送付を依頼(戸羽山浣受付)。中村を訪問。『唱語故実』返却。
- 昭和19/02/07 鳶魚へ『紙衣膳』『唱語故実』を書留小包にて送付。
- 昭和19/02/11 雑萃院に行き、『虻蜂録』謄写。布施をなす。
- 昭和19/02/13 雑萃院に行き、『虻蜂録』謄写。天祥院に行く。コンデンス乳を贈り、すぐきを貰う。『万里砂』一冊返却。
- 昭和19/02/14 鳶魚より書。即日返信す。
- 昭和19/02/17 『万里砂』書写了。
- 昭和19/02/20 雑萃院、天祥院に行く。『万里砂』一冊返却し、同写本二冊渡す。
- 昭和19/02/27 雑萃院に行く。天祥院面会。
- 昭和19/03/xx 本月中書写の書物『虻蜂録』『拳一明三』
- 昭和19/03/03 雑萃院に行き、『虻蜂録』謄写。天祥院不在。
- 昭和19/03/05 雑萃院に行き、『虻蜂録』謄写。務より鳶魚に宛てた『唱語故実』『紙衣膳』届く。
- 昭和19/03/08 鳶魚より書。
- 昭和19/03/09 鳶魚より書。
- 昭和19/03/10 小野麗子・恵嗣・晃嗣・介嗣、淡路志筑へ疎開。(昭和22/02)
- 昭和19/03/11 雑萃院に行く。茶および布施。
- 昭和19/03/12 雑萃院に行く。天祥院を訪問。
- 昭和19/03/14 鳶魚より書。
- 昭和19/03/18 中村より書。陽明文庫の件。
- 昭和19/03/19 雑萃院に行く。布施。『虻蜂録』書写了。
- 昭和19/03/22 務より鳶魚に書あり、直ぐさま「弓物一切打切」と返信。

昭和19/03/26 雑萃院に行く。天祥より写本全部持ち帰る。妙心寺より中村へ五十円渡す。

昭和19/04/03 鳶魚より書。坂本叡山文庫行き。の件。

昭和19/04/09 雑萃院に行く。天祥院不在。鳶魚へ書。坂本行き断る。中村面会。

昭和19/04/16 天祥院に行く。法然院に行き、打ち合わせ。

昭和19/04/28 天祥院より書。来月三日の法然院行き。の件。

昭和19/05/xx 本月中書写の書物、法然院『書籍目録』、「左右軒長野采女手簡」、「忍徴上人書簡」

昭和19/05/03 天祥院に行く。天祥同道にて聖沢院に行き、聖沢同道にて獅子谷法然院に行き、『書籍目録』写す。坂本行き五月十二日予定。

昭和19/05/04 鳶魚へ『書籍目録』送る。(同封にて) 昨年十二月十一日付の南陵送金に対する計算報告をする。

昭和19/05/07 鳶魚より書。法然院の件、他。

昭和19/05/10 法然院に行く。天祥院より半紙二百四十枚受取。「長野采女手簡」謄写。

昭和19/05/14 法然院に行く。鳶魚より書。『万記書籍』謄写。

昭和19/05/15 鳶魚より書。鳶魚より務に宛て五十円を送る。

昭和19/05/17 天祥院より電車賃を受く。法然院に行く。左右軒法要布施を納む。鳶魚より為替入金を受く。

昭和19/05/21 黒谷光明寺に望月師を訪ふも不在。法然院に行き中村を訪問するが同様。

昭和19/05/22 兵庫江川町藤ノ寺に望月師を訪つ。菓子料贈る。

昭和19/05/28 法然院に行き、「左右軒」渡す。

昭和19/05/29 鳶魚より書。

昭和19/06/xx 本月中書写の書物、『長野采女行業記』、『忍徴和尚鶴林記』、『七ヶ日』

昭和19/06/02 法然院に行き、『大成経』、木活十六巻披見。聖沢院を訪問。天祥院留守。

昭和19/06/05 妙心寺法命局に紙の返事をする。務より鳶魚に宛てた「采女手柬」届く。

昭和19/06/07 法然院に行く。菓子料贈る。

昭和19/06/08 鳶魚に書。五月十七日送金の計算書。

同日記末尾に「聖沢院
稲垣仁山殿」とあり。

昭和19/06/14 法然院に行く。鳶魚より書。天祥院に行き、釈・沢田両師に面会。

昭和19/06/16 鳶魚より務に宛て送金。

昭和19/06/18 法然院に行く。鳶魚より書。送金を受く。

昭和19/06/18 小野弘、ジャワ出張。

昭和19/06/19 沢口来訪。紙の件。務より鳶魚に宛てた『万里砂』『伝春寮略須知』届く。

昭和19/06/25 法然院に行く。

昭和19/06/26 鳶魚より書。

昭和19/06/28 務より鳶魚に宛て『豪盛口訣』『妙心寺出世式次第書論旨』届く。

昭和19/07/02 中村を訪つ。『困譚』他一冊借りる。法然院に行く。忍徴上人香資差し出す。鳶魚より書。中村に紙六十枚渡す。

昭和19/07/05 務より鳶魚に宛て『鶴林記』届く。

昭和19/07/16 法然院に行く。『神道大系』他謄写。九日、忍徴和尚回向す。

昭和19/07/19 法然院に行く。方丈不在。

昭和19/07/25 鳶魚、務に宛て『水月ものはなし』等小包にて返却。

昭和19/08/07 鳶魚、務に宛て小包一つ出す。

昭和19/10/14 妻琴代、手術のため上田病院に入院。(昭和19/11/19)

昭和19/12/05 沢口師来訪。

昭和20/05/29 妻琴代、淡路志筑にて逝去。持明院清平妙琴大姉。

昭和20/08/xx 須磨区西尾邸に転居。(昭和23/08)

昭和20/09/xx 「雑炊を忘れたる櫓火かな」の一句成る。

昭和20/12/26 孫小野介嗣の誕生日に、「櫓火して笹鳴きを聞く朝なりき」の一句を詠む。

同日記末尾に「大本山妙心寺 大法会局常在委員 沢口泰憲」の名刺を挟む。

神戸市須磨区
離宮西町一丁
目西尾邸内

- 昭和21/01/01 歳旦吟「御慶申すも自問自答の雑煮かな」。
- 昭和21/01/17 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について、鳶魚序文依頼のこと。
- 昭和21/01/28 妹きくゑの夫畠田誠一、東京にて逝去。
- 昭和21/05/12 小野弘、ジャワより須磨へ帰還。
- 昭和21/10/21 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について。
- 昭和21/10/28 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について。
- 昭和21/11/04 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について。
- 昭和21/11/15 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について。
- 昭和21/12/01 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版について。
- 昭和21/12/xx 歳末、拾った財布を落とし主に返す。狂歌「春袋おしだまとて祝ひつゝ暮に拾ひし財布かへさん」「くれのかねおとしたまゝと思ひしを捨てたまはる今朝ぞうれしき」。
- 昭和22/01/08 神戸に帰る。
- 昭和22/01/17 淡路へ行き、翌18日転出手続き。19日帰神、神戸転入手続き。この年、月に複数回淡路・神戸を往復。また、天理・伊丹・城崎へ頻繁に足を運ぶ。翌年もほぼ同様。
- 昭和22/01/23 天理へ行く。
- 昭和22/02/05 小野麗子および孫恵嗣・晃嗣・介嗣、疎開先の淡路志筑から須磨へ転居。「孫の舌のまはりかねたる御慶かな」「孫の顔ならべて見たる雑煮かな」「春の宵孫の寢息の静かなる」「老日永伽羅のかほりも唱ひけり」の四句成る。)(「手帳(昭和二十二年度)」「(小野文庫41)では、「孫の舌の」「孫の顔」「春の宵」の三句に、「我輩は前生は蛇神エチヨデズ日の本に来て淡路島守」の一首を付す。)
- 昭和22/03/xx 『近代歌謡考説』自序成る。
- 昭和22/03/06 鳶魚の『近代歌謡考説』序成。
- 昭和22/04/20 中村幸彦より書。『近代歌謡考説』出版計画挫折のこと。
- 昭和22/04/24 天理へ行く。
- 昭和22/05/09 小野弘・麗子の長女暢子誕生。
- 昭和22/06/12 陳書会出席。

昭和22/08/26	天理へ行く。
昭和22/10/03	吉田書店へ本代250円送金。
昭和22/10/16	陳書会出席
昭和22/10/26	東京へ行く。(10/31帰神)
昭和22/10/28	畠田誠一長女敦子の結婚式に出席。(於・東京三越) 結婚を祝して、「菊植えて関
	雫の詩をばうたひけり」の一句を贈る。
昭和22/11/19	天理へ行く。書物の貸借あり。
昭和22/12/05	金曜会出席
昭和22/12/11	天理へ行く。
昭和22/12/12	金曜会出席
昭和22/12/13	陳書会出席
昭和22/12/19	金曜会出席
昭和22/12/26	金曜会出席
昭和23/01/09	金曜会出席
昭和23/01/16	金曜会出席
昭和23/01/23	金曜会出席
昭和23/01/30	金曜会出席
昭和23/02/06	金曜会出席
昭和23/02/13	陳書会出席
昭和23/02/22	史談会出席
昭和23/02/27	金曜会出席
昭和23/03/05	金曜会出席

書会」とのみあり、出席は類推。以下「金曜会」も同じ。

昭和23／03／12 金曜会出席。

昭和23／03／26 金曜会出席。

昭和23／03／28 史談会出席。

昭和23／04／16 金曜会出席。

昭和23／04／23 金曜会出席。

昭和23／04／27 吉田書店へ本代280円支払う。

昭和23／04／30 金曜会出席。

昭和23／05／01 陳書会出席。(於・高橋宅)

昭和23／05／04 森谷書房より、注文書籍出荷の通知八ガキ着。

昭和23／05／07 金曜会出席。

昭和23／05／10 森谷書房へ本代70円送金。

昭和23／05／14 金曜会出席。

昭和23／05／21 金曜会出席。

昭和23／06／04 金曜会出席。

昭和23／06／07 天理図書館へ行き、元禄の吉原細見を調べる。

昭和23／06／09 鳶魚へ書。

昭和23／06／11 金曜会出席。

昭和23／06／18 金曜会出席。

昭和23／06／25 金曜会出席。

昭和23／06／28 淡路志筑の忍頂寺本家臨池庵にあった十三重塔および五智如来、引撰寺へ移され、その後、本家の居宅・庭、売却される。

昭和23／07／02 金曜会出席。

昭和23／07／05 鳶魚へ書。

『浮世狂界詩林選』(務
森谷書房) 1点返品。

書店からの請求額は60
円+送料5円。

昭和23/07/09	金曜会出席	
昭和23/07/10	陳書会出席	
昭和23/07/16	金曜会出席	
昭和23/07/18	史談会出席	
昭和23/07/23	金曜会出席	
昭和23/07/24	史談会メンバー、河辺・中谷・貞永・折茂2名・務の計6名にて淡路志筑行き。	
昭和23/08/06	婿、鳶魚を訪つ。	
昭和23/08/06	金曜会出席	
昭和23/08/07	鳶魚より書。陳書会出席	
昭和23/08/18	鳶魚へ書。	
昭和23/08/19	鳶魚より書。	
昭和23/08/21	小野麗子および恵嗣・晃嗣・介嗣・暢子、淡路浦村に移住。(昭和25/03) 務は神戸に残り、浦村と神戸を行き来する。	
昭和23/08/26	鳶魚へ書。	
昭和23/09/03	金曜会出席	
昭和23/09/05	浜家来訪、綿谷を訪問	
昭和23/09/07	鳶魚宅へ荷物送る。中谷来訪	
昭和23/09/13	鳶魚へ書	
昭和23/09/15	東京へ行く。翌16日世田谷、田園調布を訪問。	東京
昭和23/09/16	鳶魚宅へ行く。すぐ帰る。	
昭和23/09/17	鳶魚宅へ居候。鳶魚編纂の『江戸語彙』(未完)の作業のためかこの頃、「糸瓜残して淡路へ帰る一家哉」「書物売つて転宅しけり須磨の秋」の二句成る。	東京都世田谷区世田谷一丁目三田村方

7月25日付の諸費用中に引撰寺の名がみえる。

「忍頂寺務略年譜」(小野文庫474)では、昭和23年8月～昭和23年末頃とするが、9月～の

昭和23／09／18 鳶魚と豪徳寺へ、満道師の故栖を見る。後、鳶魚と源正寺と西鶴輪講（第二回）に行く。出席、木村、柴田、鈴木、森。

昭和23／09／19 鳶魚と同道、佐成氏を訪う。不逢。

昭和23／09／21 鳶魚と同道、葉山の松尾宅へ行く。

昭和23／09／25 東洋大学専門部講師に就任。

昭和23／09／27 田園調布へ行く。

昭和23／10／03 田中を訪問。

昭和23／10／06 朝、柴田宵曲を訪ね、江戸語彙の原稿（力行）を渡す。

昭和23／10／10 鳶魚と同道、佐成氏を訪う。快談。辰巳屋より書籍購入。

昭和23／10／16 源正寺にて西鶴輪講会（第三回）。宵曲に江戸語彙（サ行）を手渡す。

昭和23／10／17 阿部、田園調布へ行く。

昭和23／10／19 鳶魚と葉山へ。『好色一代女』開会。

昭和23／10／21 辰巳屋へ行き、書籍代950円支払う。

昭和23／10／24 鳶魚同道、大場信統を訪う。

昭和23／10／27 島田来訪。

昭和23／10／29 田園調布へ行く。

昭和23／11／03 阿部、田中を訪問。

昭和23／11／07 田中を訪問。

昭和23／11／09 柴田を訪ね、江戸語彙の原稿（サ行）を渡す。

昭和23／11／11 河竹来訪。

昭和23／11／12 鳶魚同道、柴田三之助を訪う。不逢。三越展覧会へ行く。

昭和23／11／13 鳶魚、吉田幸一と烏山の西鶴輪講会へ行く。阿部、遠藤来訪。

昭和23／11／14 島田来訪。

昭和23／11／16 西鶴輪講会。

誤りか。

昭和23/11/17 小川恭一に会う。本覚院へ行く。

昭和23/11/24 阿部を訪問。鳶魚、河竹、柴田と北光書房にて会同。

昭和23/11/28 島田来訪。

昭和23/12/02 午前中柴田宵曲に『江戸語彙』（夕行）を渡す。

昭和23/12/05 田園調布へ行く。

昭和23/12/10 島田来訪。

昭和23/12/11 東大研究室へ行く。

昭和23/12/14 葉山へ行く。

昭和23/12/18 鳶魚と烏山の西鶴輪講会へ。柴田に『江戸語彙』（夕行残り）を渡す。

昭和23/12/20 中野の一九会へ行く。

昭和23/12/21 東西出版社へ行く。

昭和23/12/22 リーダース社へ行く。

昭和23/12/24 書物展望社社へ行く。

昭和23/12/25 山崎より送金500円あり。

昭和23/12/30 田園調布へ行く。税金領収書渡す。

昭和23/12/31 東京を午後五時の列車で発ち帰郷。

昭和24/01/01 西尾邸に入る（カ）。

昭和24/01/04 志筑へ行く。笹山、浄見、堀と会す。

昭和24/01/05 鳶魚へ書。

昭和24/01/07 金曜会出席。浜家、江見と会す。

昭和24/01/09 長唄。智蔵院13回忌。

昭和24/01/15 鳶魚へ書。

昭和24/01/19 18日出立、東京へ行く。三田村鳶魚邸に入り、「渡り烏足のためたき丸寝かな」の東京

淡路浦村（東
浦町）

務の「手帳」には「井
筒西尾」とのみ記載。

昭和24／01／20 田園調布へ行く。
 一句成る。

昭和24／01／22 吉田幸一、鳶魚と烏山の輪講会へ。森、前回に続き欠席。
 昭和24／01／23 島田来訪。上野図書館へ行き、万治の吉原細見を調べる。
 昭和24／01／25 鳶魚と葉山へ。以文、南陵氏あり。一泊。
 昭和24／01／26 北光より補正原稿持ち帰る。
 昭和24／01／30 阿部を訪問、島田来訪。
 昭和24／02／02 島田を訪問。
 昭和24／02／08 島田、阿部を訪問。
 昭和24／02／12 「全日本文化協会報告」来る。
 胃痛あり。
 昭和24／02／14 胃痛あり。
 昭和24／02／20 野田を訪問。
 昭和24／02／27 阿部を訪問。胃痛あり。
 昭和24／03／01 昼頃柴田宵曲を訪れ、『江戸語彙』原稿を渡す。
 昭和24／03／06 田園調布へ行く。
 昭和24／03／11 柴田へ葉書を出す。
 昭和24／03／12 島田来訪。
 昭和24／03／14 野田を訪問。
 昭和24／03／15 鳶魚傘寿の賀。
 昭和24／03／16 鳶魚、葉山へ、務は行かず。

昭和24／03／19 柴田を訪問。
 昭和24／03／21 田中を訪問。
 昭和24／03／25 転出手続きをとる。

「一人アタリ、197.18」
 この付記は、会費か。

務の「手帳」には「葉山行」と記載あり。

- 昭和24／03／26 田中、阿部、秋葉、野田を訪問。
- 昭和24／03／28 田園調布、野田を訪問。
- 昭和24／03／29 島田、野田、田園調布へ行く。
- 昭和24／03／30 帰郷。浜家宅に宿泊。東京から淡路への帰郷途次、月初めの金曜会に出席。
金曜会出席、あるいは翌31日か。
- 昭和24／03／31 浦村着。狂歌「十六夜とたちまち出でんこの本をぬまちもせずにしづきへぞいぬ」成る。
淡路浦村（東浦町）
- 昭和24／04／05 鳶魚へ書。
鳶魚へ書。
- 昭和24／04／15 鳶魚へ『教草』送る。
- 昭和24／04／28 鳶魚より書。中村幸彦より忍頂寺通報の書目の書物なしと申しこす由。
雑誌『金曜』の編輯同人となる。その他の編輯同人は池長孟、川崎芳熊、直木太郎、増田五良、松井佳一、岡田利兵衛、長田富作。世話人は西村貴一。
- 昭和24／05／xx 鳶魚より書。中村幸彦より『諺の通』他20点ばかり資料届到の由。
鳶魚へ書。
- 昭和24／05／02 小野弘・麗子次女方子誕生。
- 昭和24／05／10 生駒へ転居。「久仰の眼に霞みけり宝山寺」「錆鮎や藻のかけに寄る一休み」の二句成る。
奈良県生駒郡生駒町菜畑
- 昭和24／05／10 月末より風邪を患う。
- 昭和25／03／xx 歳旦吟「健啖の孫にほゝえむ雑煮かな」「御所の湯に石を刻むと初夢に」。
- 昭和25／01／01 脳溢血にて倒れるも意識はあり。
- 昭和26／01／27 漸次快方に向かうが、左半身麻痺あり。
- 昭和26／03／xx 淡路志筑に墓碑建立。
- 昭和26／04／12 未明に再発。意識不明。
- 昭和26／10／02 奈良生駒にて逝去。享年六十六。戒名は「眞觀院流芳静村居士」。死に際しては、生前に自ら告別の文章を草す。

- 昭和29／03／25 山村太郎の薦めにより、務遺族より大阪大学文学部に務の蔵書を譲る。
- 昭和35／10／28 大阪大学国文学研究室において、忍頂寺本の稀本について解説を付した目録を作成し、『語文』誌上に掲載する計画あり。それに先立ち、山村太郎から務遺族に、文庫の由来にかかる資料提供の依頼が示される。
- 昭和40／09／13 山陽電鉄正木紳および務遺族、大阪大学国文学研究室を訪問。「忍頂寺静村文庫」として務蔵書の収蔵を確認する。
- 平成10／05 「文学部創立五十周年記念 忍頂寺文庫特輯」、『語文』誌上に掲載。
- 平成12／06 小野麗子所蔵の務旧蔵資料および務自筆稿本類・務宛書簡等、大阪大学附属図書館に譲る。「小野文庫」と名付く。
- 平成20／03 「大阪大学附属図書館蔵 小野文庫目録」成る。
- 平成23／03 「仙台忍頂寺家所蔵資料目録」成る。
- 平成23／03 『大阪大学附属図書館所蔵 忍頂寺文庫目録』成る。

